

2018.7

やさしい囲碁史

古代の珍瓏

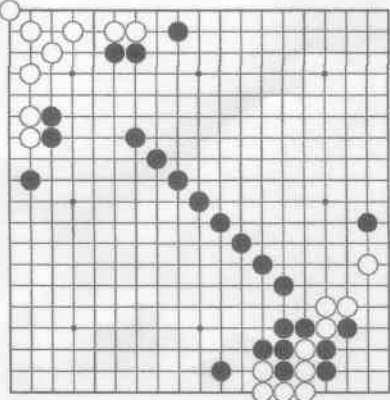
古作 登 (大阪商業大アミューズメント産業研究所主任研究員)

古くから詰め碁の問題は重要視され、最古の棋書とされる『忘憂清楽集』(12世紀初頭、中国・北宋時代の編集)にも掲載されているが、詰め碁の中でも特に趣向を凝らしたものを「珍瓏」(ちんろう)と呼ぶ。「珍」は貴重、「瓏」は玉(ぎょく)が触れ合って発する音のこと。現存する最古の珍瓏は南宋(1127~1279)の時代に著された『玄玄碁経』にある。これは現在の日本でも原書を基にした解説書が複数存在する。

第19回

詰め碁は上達に際し昔から重要と考えられ、同書には「序の部」「変の部」「勢の部」といった章があり、作品には「六国帰秦勢」(春秋戦国時代、秦一国に他の六国が統一される)、「探虎穴勢」(虎の穴を探る、危険を冒して事を行うたとえ)のように歴史や格言にちなんだ名が付けられている。見た目や手順の面白さ、美しさを重視した実戦にはまず出てこない形のものもあり、それらは鑑賞して楽しんだのだろう。

図の問題は「千層宝塔勢」。宝塔とは仏陀や高僧の骨を納めた塔のこと。本作では白が左下の黒との攻め合いに勝てるかを問う。左下に白が打って黒石をシチヨウで追い掛けると、千層もある高い宝塔のような形が盤上に出現する。最初の手筋だけ気付けば後は難しくないので、盤に並べて解くと題名の意味がよく分かるだろう。



「千層宝塔勢」白先(105手) 白から打って左下の攻め合いに勝つのが目標。解説は110ページで。

【やさしい囲碁史】解説

「千層宝塔勢」(54ページ)

初手白1のツゲが攻め合いの手筋です。黒2のツギに白3から9まで余裕を与えず攻め、白11のコスミと白13のツギもポイント。

黒14と出られますが、白15のあたりと黒16のツギを換われば、後はシチヨウで追うだけ。完成形はぜひ盤上で鑑賞してみてください。

